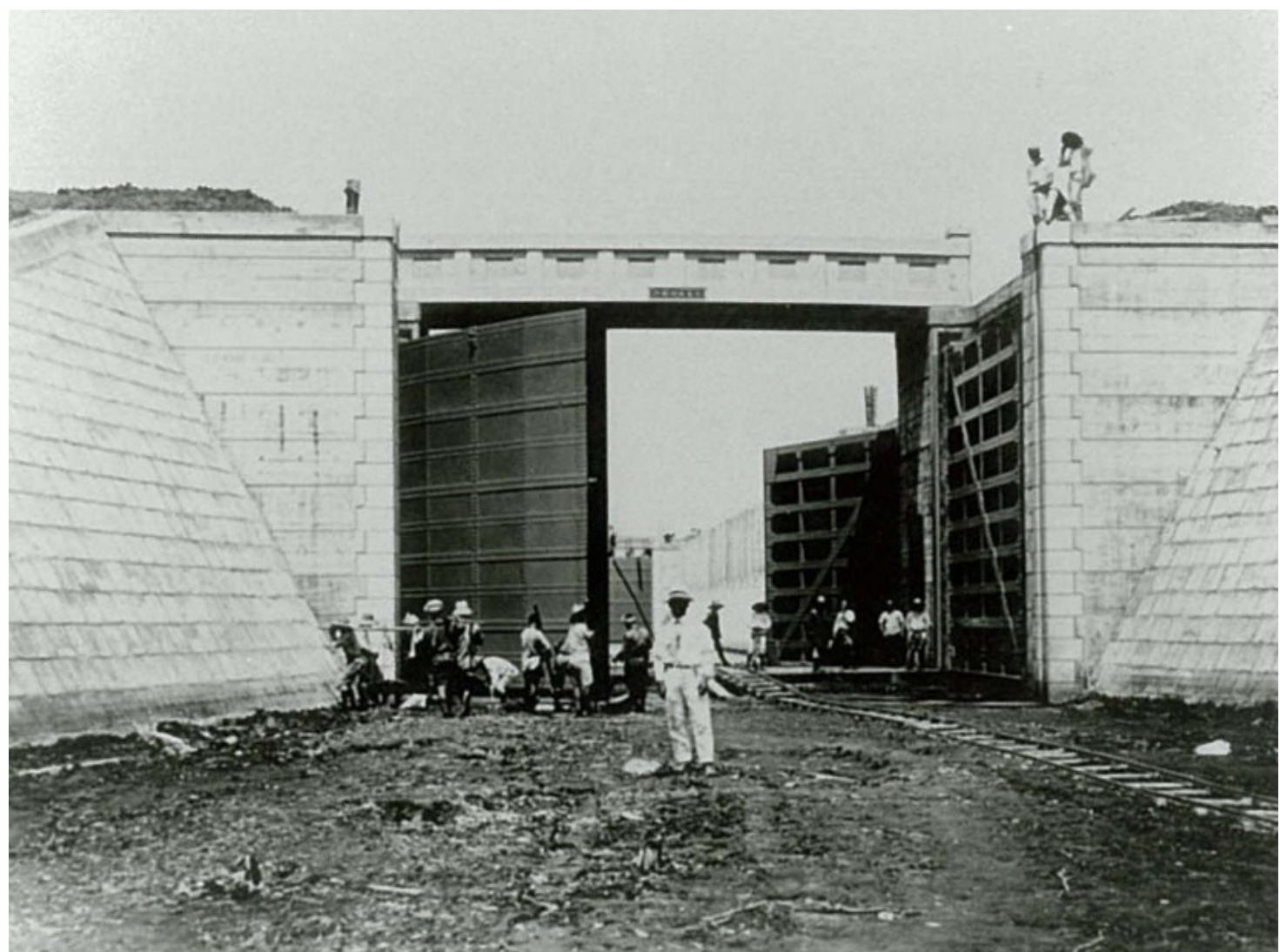


宮本武之輔

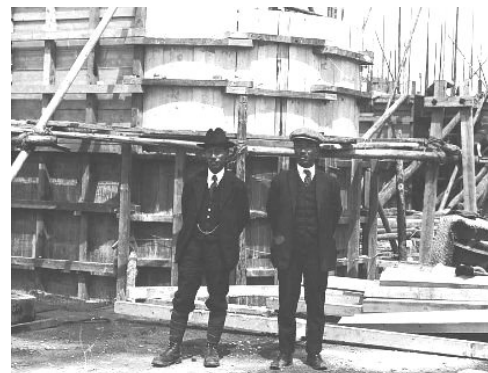
～荒川放水路開削工事に携わったエンジニア～

荒川放水路開削工事では、おもに小名木川閘門の設計施工を担当しました。

荒川上流部改修から
100年
1918-2018



小名木川閘門と宮本武之輔



青山士（左）と宮本武之輔（右）



大河津可動堰

宮本武之輔

宮本武之輔は、1911（明治44）年から始まる荒川放水路開削事業で、おもに小名木川閘門の設計施工を担当しました。

荒川放水路開削事業の主任技師であった青山士と関係が深く、二人は荒川放水路竣工後に赴任した信濃川大河津分水の修繕工事において、所長と主任を勤めました。信濃川大河津分水の修繕工事に携わる頃、青山と宮本の間には、荒川放水路開削工事以来に築かれた強い信頼関係があったと考えられています。

宮本は、当時地位の低かった技術者の地位向上に尽力したことや、現場の士気高揚に特段の配慮をしたことなどが有名です。

▶ 経歴

宮本武之輔は、1892（明治25）年1月5日、愛媛県和気郡興居島（わけぐんごごしま）の由良にて宮本藤次郎・セキの長男として出生しました。15歳の時宮田兵吉の援助によって上京、勉学に励み東京帝国大学土木工学科を主席で卒業後、1917（大正6）年内務省に入省しました。利根川、荒川の大規模河川改修を手掛け、その後1923（大正12）年から1925（大正14）年の1年半、鉄筋コンクリート構造物の研究のため、欧米諸国を歴訪しました。

1927（昭和2）年の信濃川大河津自在堰陥没事故で、内務省の威信をかけた可動堰建設の陣頭指揮をとり、出水や風雪、風土病と戦いながら、わずか4年後の1931（昭和6）年に完成させ、越後平野を洪水から守りました。

また、コンクリート工学博士となり、「鉄筋コンクリート」「治水工学」等を執筆1937（昭和12）年に東京帝国大学教授（河川工学）を兼任しました。日本工人倶楽部発足など、技術者の地位向上の運動を展開するとともに、科学技術の体制づくりのため、科学技術庁の前身である技術院の設立に力を尽くしました。

1940（昭和15）年に内務省土木局から、内閣直属の中国占領地域に対する最高行政機関であった興亜院の技術部長に抜擢され、1941（昭和16）年には国の最高政策立案機関であった企画院の次長（官僚のトップ）に就任しました。しかし同年12月、東京で悪性肺炎のため急逝しました。享年49歳という若さでした。



内務省土木局第一技術課
幹部として栄転になった頃の
宮本武之輔

▶ 荒川放水路と小名木川閘門

宮本武之輔は、1919（大正8）年8月、荒川放水路開削事業のうち下流部の小名木川閘門の設計施工を命じられます。このときの主任技師（現所長）が、パナマ運河開削工事に日本人技術者としてただ一人携わった青山士でした。

小名木川閘門は、荒川放水路が江戸川と隅田川を結ぶ通行用掘割であった小名木川を分断するため、その交点に逆流防止と舟運確保のために計画されたものです。この閘門は、最新の鉄筋コンクリート工法を導入して建設されましたが、戦後その役割を終えて解体され現在は、その遺業を偲ぶことはできません。



小名木川閘門の位置

コ ラ ム 宮本武之輔の顕彰碑と胸像

宮本の生まれ故郷である、興居島の由良町（現愛媛県松山市）には、顕彰碑が設置されています。顕彰碑の表面には「偉大なる技術者 宮本武之輔博士 この島に生る」と彫られ、興居島出身の偉大な人物を称えています。また顕彰碑の隣には、宮本の偉業を称え、2013（平成25）年に銅像が設置されました。



銅像設置式典

アクセス

かつての小松川閘門位置
電車：都営新宿線「東大島駅」下車、徒歩約15分
住所：東京都江東区東砂2丁目17-1



かつての小松川閘門位置

